

人口減少時代における地域課題調査研究

徳島県立総合大学校とくしま政策研究センター
研究員 森本俊司

1. はじめに

人口減少、少子高齢化が問題視され始めてから久しい。近年では、2010年から30年後の2040年時点において、20～39歳の女性が半減する自治体を「消滅可能性都市」とし、全国で約半数の896市町村、県内の17市町村がこれに該当するとの発表が、民間の研究機関である「日本創生会議」によってなされ話題となった。

また、平成27年国勢調査の速報値で徳島県は過去2番目の減少率となり、あらためて人口規模の縮小を印象付ける結果となった。

2. 調査の目的

人口減少は、経済の停滞など社会全体の活動に直結した課題である。これを捉えるには、一般的には県あるいは市町村単位での分析となるが、地域活動、活力の低下が懸念される昨今においては、より小地域の状況を知ることが重要になる。

現況、人口が増加していても、近い将来減少傾向に転じる地区もあると推測される。その大きな要因は高齢化、少子化であり、支えられる人が増える一方で、支える人が減少するといういびつな状況に陥る。

また、高齢化にともない、徒歩圏内に商業施設を有しない地区にあっては、買物弱者が増大する可能性がある。

このすう勢を止めることはできないにしても、自助をも促しつつ地域の活力を維持していくため、特に市町村行政にあってはこの動向を把握しておく必要がある。こうした状況を踏まえ、その糸口となることを期し、本調査研究を実施することとした。

3. 県内の人口推移状況の検討

(1) 人口推計による小地区別推移

推計にあたっては、平成27年国勢調査の小地区別人口が現時点において公表されていないことから、平成17年と平成22年の国勢調査結果を比較したコーホート要因法によるものとしている。通常は市町村単位での比較であるが、

今回は小地区での比較とし、より詳細にみることにした。また、人口規模が小さいため、得られた数値自体の信用性が低いことから、概ねの傾向として扱うものとした。

(2) 推計方法

推計の算出を説明すると次のようになる。

$$\begin{aligned} & \text{男子0～4歳（2005年）から男子5～9歳（2010年）への変化率} \\ & = \text{男子5～9歳人口（2010年）} / \text{男子0～4歳人口（2005年）} \end{aligned}$$

以下、同様に

$$\begin{aligned} & \text{男子5～9歳（2005年）から男子10～14歳（2010年）への変化率} \\ & \text{男子10～14歳（2005年）から男子15～19歳（2010年）への変化率} \\ & \dots \end{aligned}$$

得られた変化率を掛け合わせる。

$$\begin{aligned} & \text{男子5～9歳人口（2015年）} = \text{男子0～4歳人口（2010年）} \times \\ & \text{0～4歳変化率（0～4歳から5～9歳への変化率）} \end{aligned}$$

これらを女子についても行う。

出生数（0～4歳人口）は婦人子ども比から求める。

$$\text{婦人子ども比} = \text{0～4歳人口} \div \text{15～49歳女子人口}$$

$$\text{0～4歳人口（2015年）} = \text{15～49歳人口（2010年）} \times \text{婦人子ども比}$$

これを男女児性比により、男子出生数と女子出生数に分ける。

こうして得られた数値を足し上げると2015年における人口が推計される。また、この間得られた変化率が将来にわたって一定で推移すると仮定することにより、2020年以降についても同様に求めることができる。

(3) 比較方法

小地区別推計の中から、増加または一定で推移するとされた所を抽出し、「増加」「維持」「当面維持、以降減少」に分類した。地図上では、それぞれ、オレンジ色、緑色、水色に着色している。

小地区においては人口規模の小さいものも多く、一時的な流出入の影響を大きく受ける。例えば、マンション建設、住宅団地整備、老健施設整備などが考えられる。

こうしたものの影響により、特定の年齢層が極端な増加を示す特異値が生じ

ているケースも見られる。また、人口規模が極端に小さい地区で「増加」を示すものもあるが、それらについても抽出している。

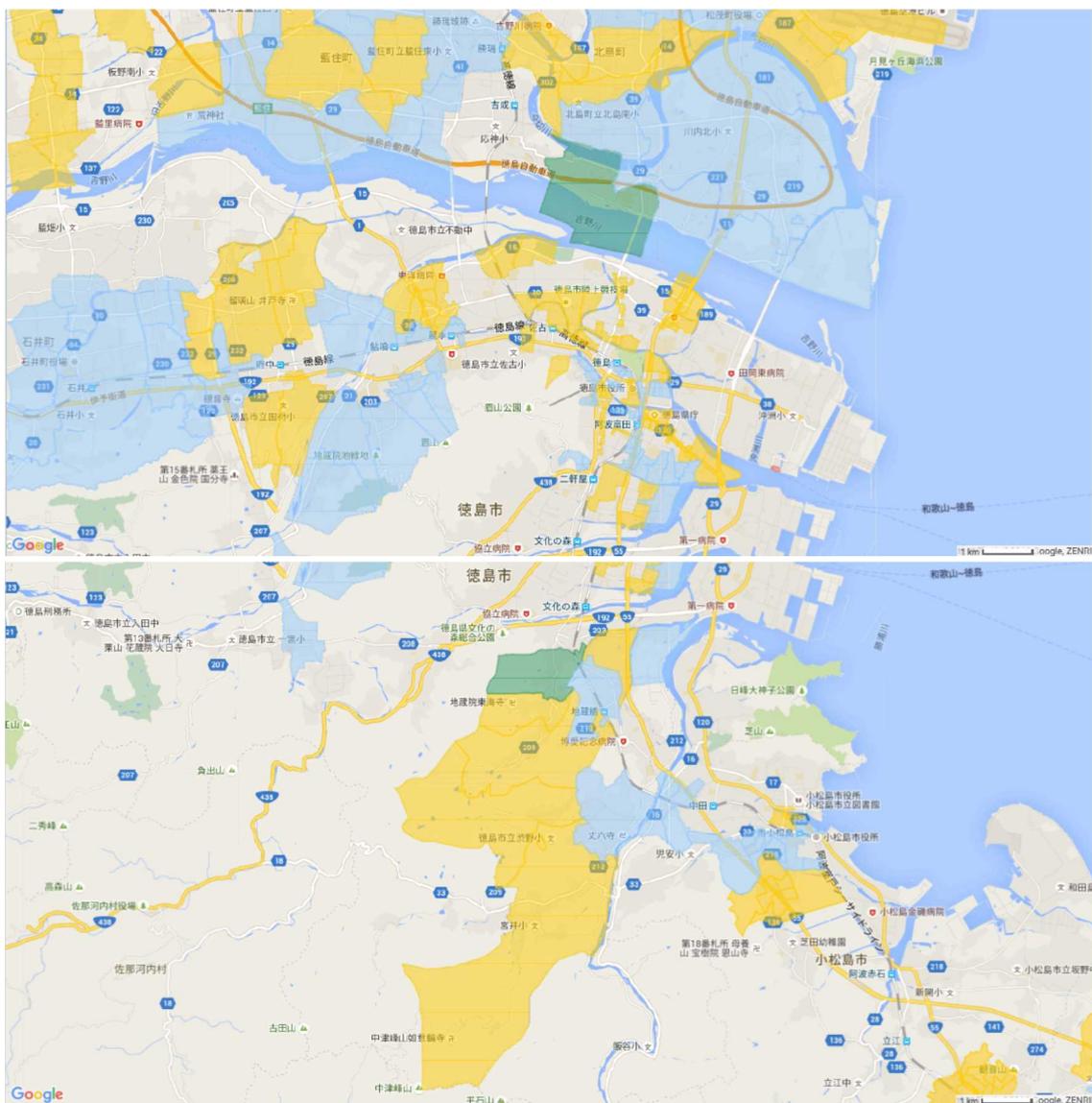
また、総数で増加を示すが男女いずれかの合計が漸減する地区、減少を続けた後に増加に転じる地区は「当面維持，以降減少」に含めるものとした。

以下の結果については、仮定を前提とした推計であることをあらためて強調しておく。

4. 各市町村における推計

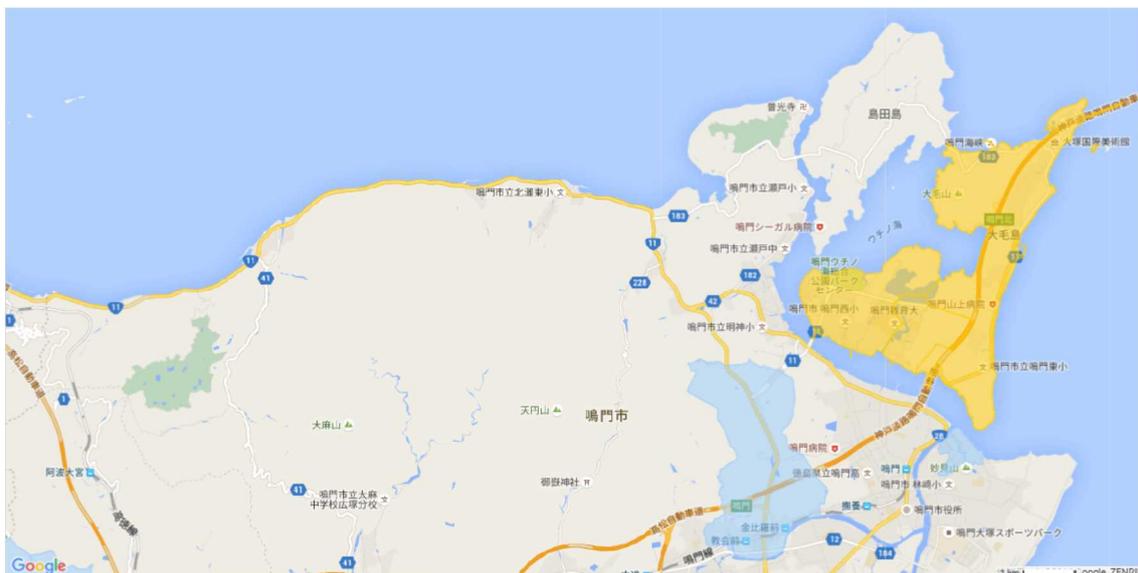
(1) 徳島市

国道55号，192号，県道30号などの幹線道路周辺のほか，中心市街地における増加傾向が見られる。



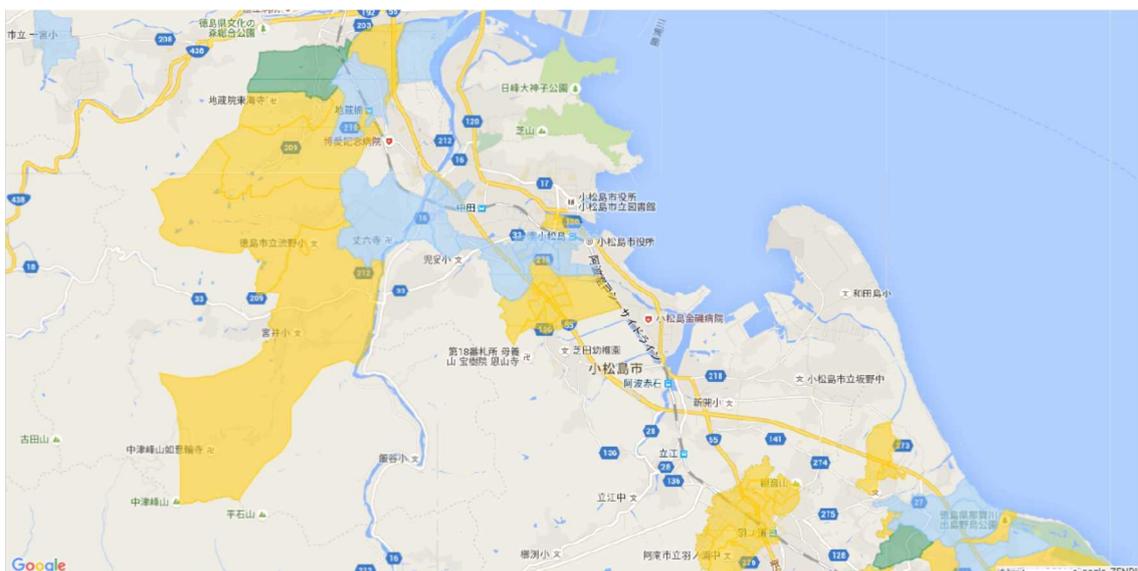
(2) 鳴門市

一部において増加あるいは当面維持，以降減少の地区が見られるほか，高齢層急増の特異値を示す地区が存する。



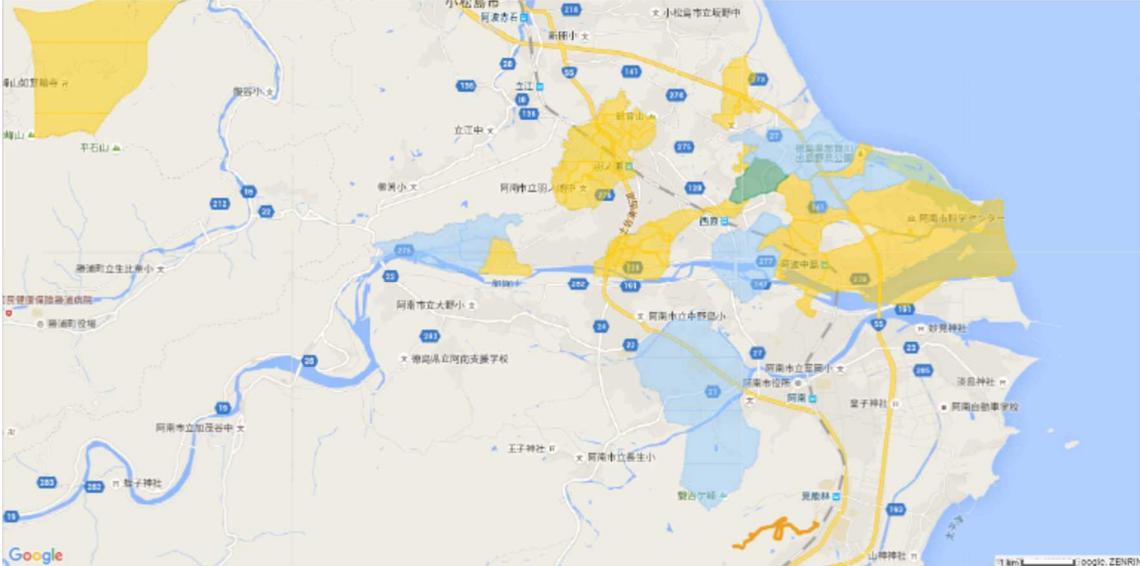
(3) 小松島市

国道55号周辺において増加あるいは当面維持，以降減少の地区が見られる。



(4) 阿南市

旧那賀川町，旧羽ノ浦町の国道55号周辺に，増加あるいは当面維持，以降減少の地区が集中する。



(5) 吉野川市

鴨島町，美郷の一部に増加の地区が見られる。美郷の一部地区での増加は高齢層の増加が大きく寄与している。そのほか鴨島町に当面維持，以降減少の地区が存する。



(6) 阿波市

県道12号周辺に増加あるいは当面維持、以降減少の地区が見られる。

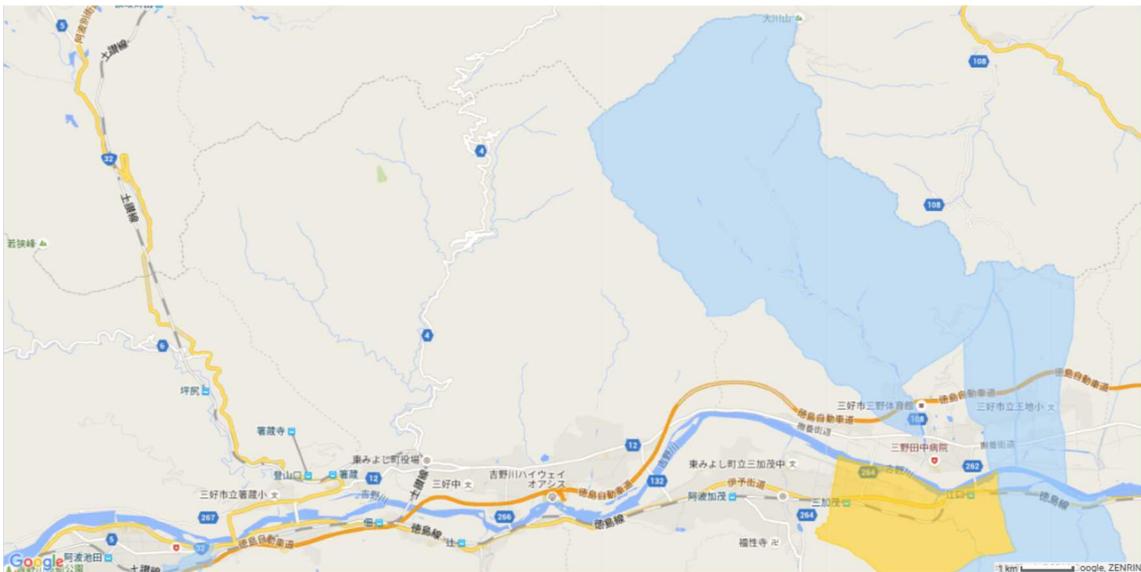


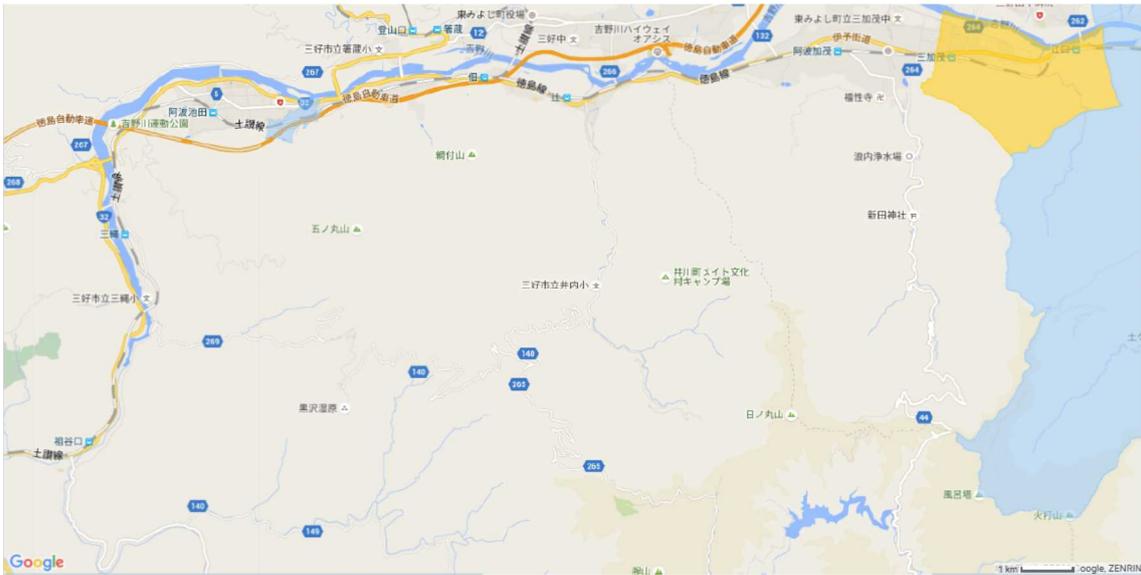
(7) 美馬市

目立った増加の地区は見られなかった。

(8) 三好市

三野町，池田町の一部に当面維持，以降減少の地区が見られる。



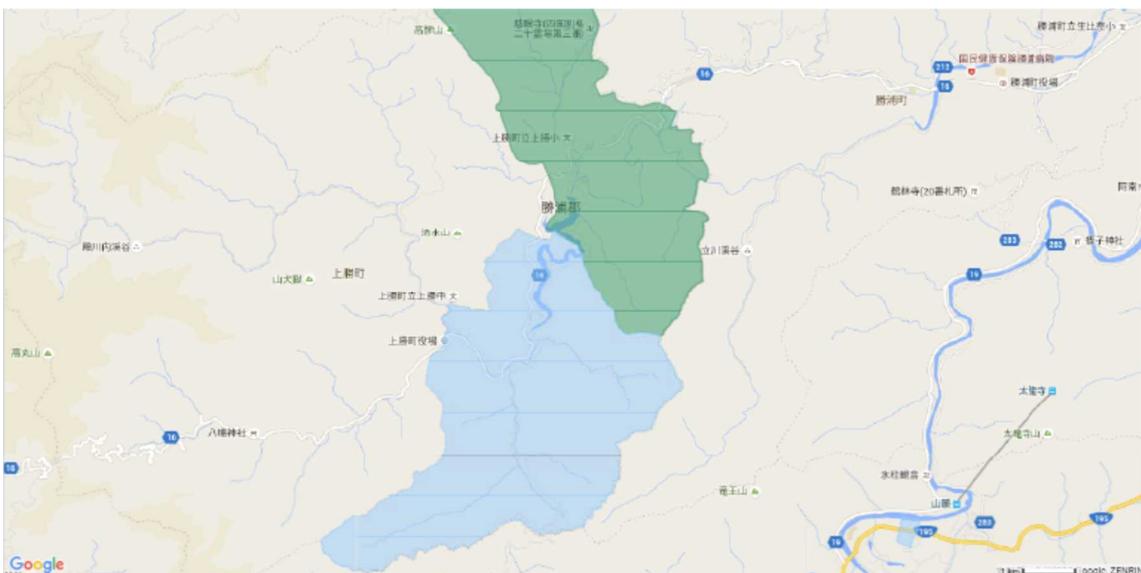


(9) 勝浦町

目立った増加の地区は見られなかった。

(10) 上勝町

一部に高齢層急増の特異値が見られる。高齢化が進んだ結果、高齢層の変化率が高くなった影響と考えられる。

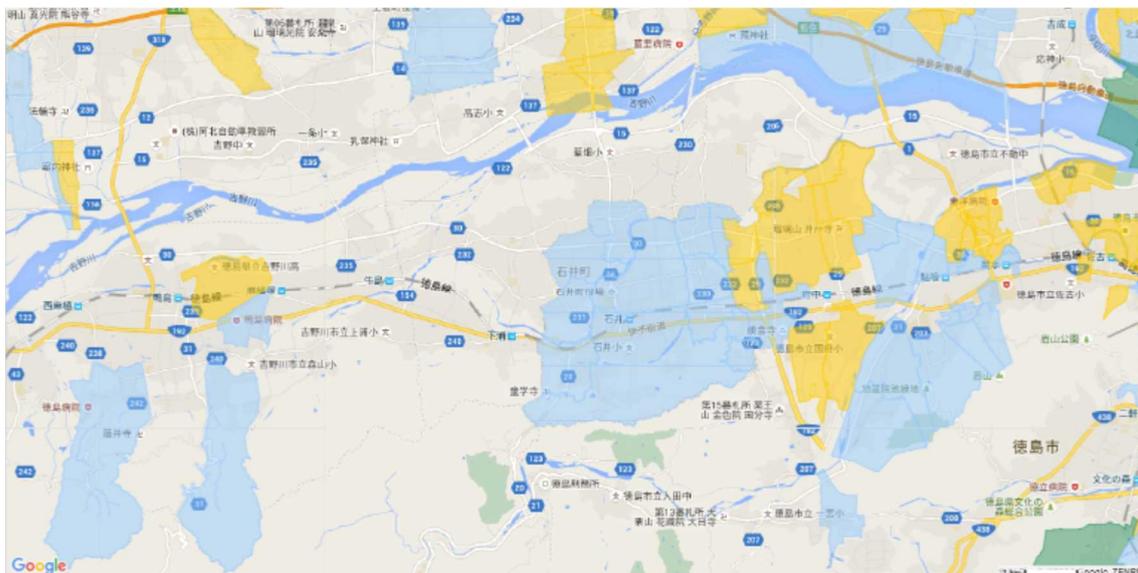


(11) 佐那河内村

目立った増加の地区は見られなかった。

(12) 石井町

国道192号，県道30号の周辺において当面維持，以降減少の地区が見られる。

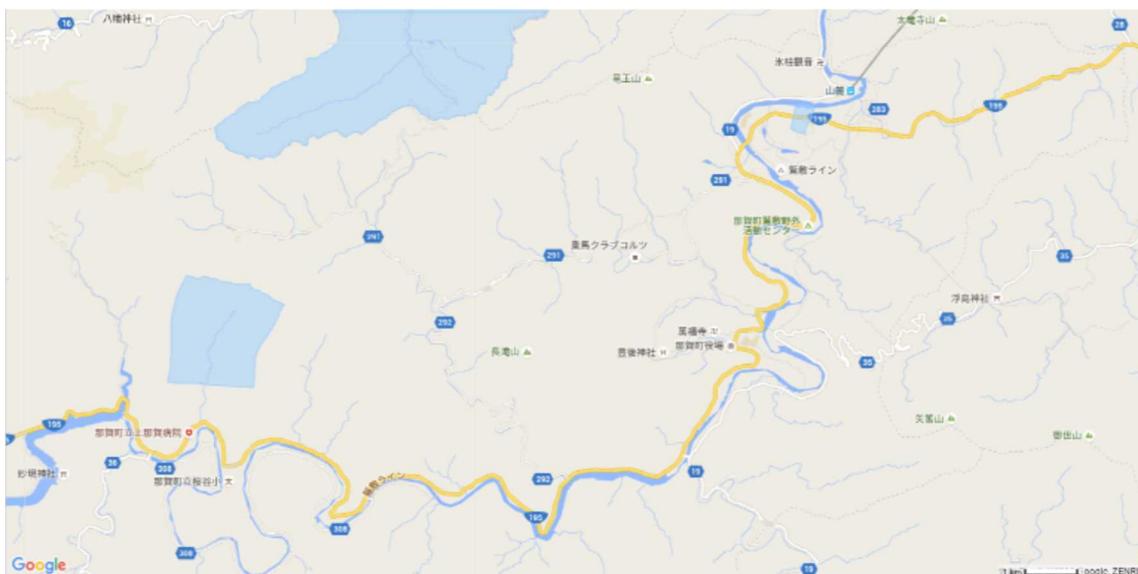


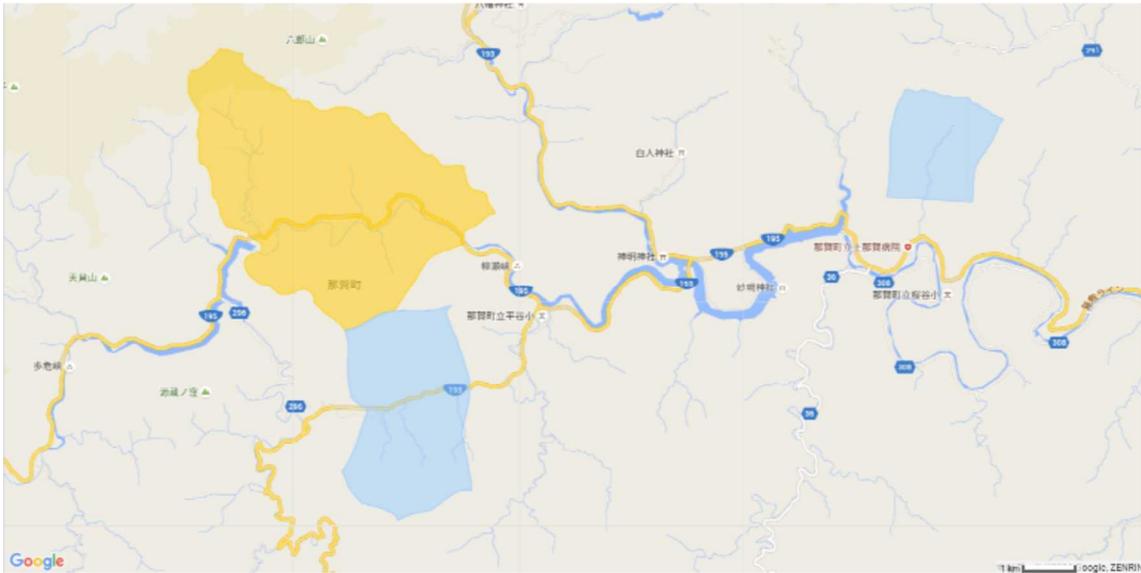
(13) 神山町

目立った増加の地区は見られなかった。

(14) 那賀町

増加あるいは当面維持，以降減少の地区が点在する。人口規模が小さいことも影響していると考えられる。一部で高齢層急増の特異値が見られる。





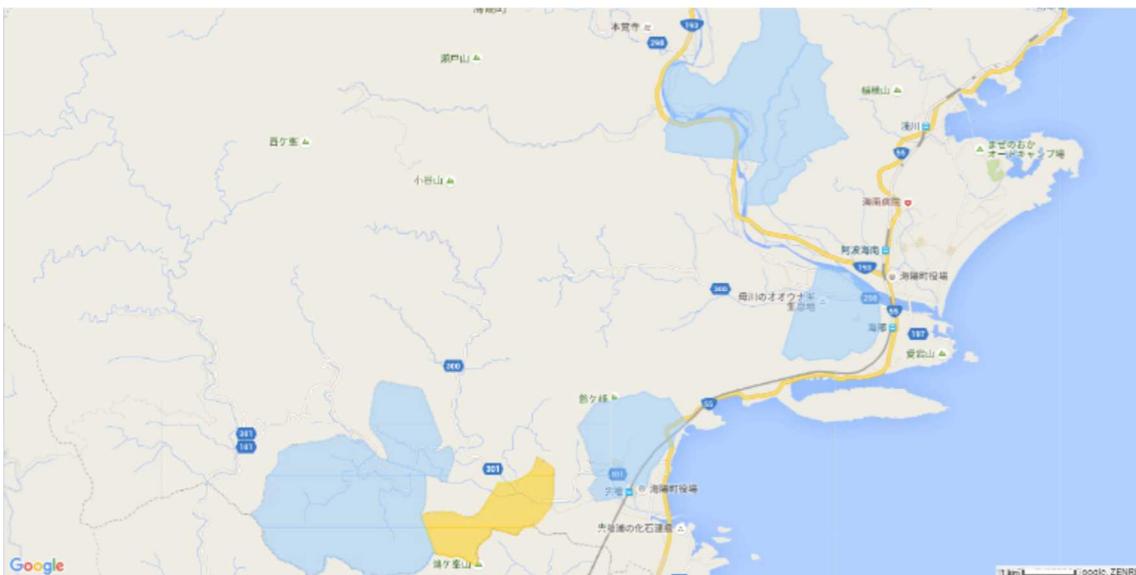
(15) 牟岐町
目立った増加の地区はみられなかった。

(16) 美波町
国道55号周辺に当面維持，以降減少の地区が見られる。



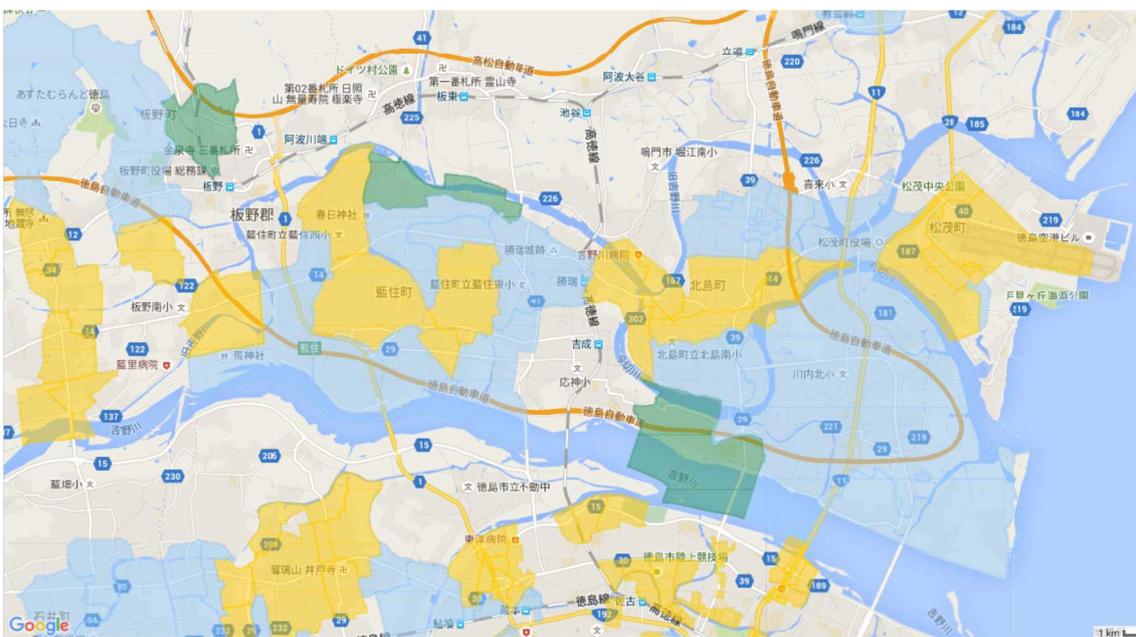
(17) 海陽町

増加の地区が見られるが、人口規模が小さいことも影響していると考えられる。そのほか当面維持、以降減少の地区が点在する。



(18) 松茂町

増加と当面維持、以降減少の地区が混在する。



(19) 北島町

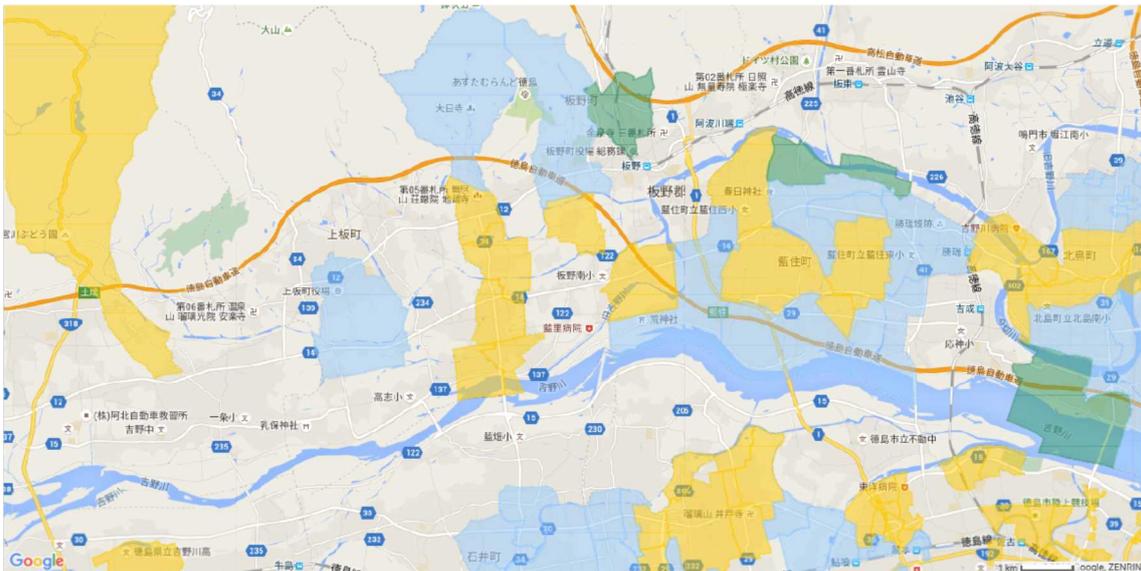
増加と当面維持，以降減少の地区が混在する。

(20) 藍住町

増加と当面維持，以降減少の地区が混在する。一部に高齢層急増の特異値が見られる。

(21) 板野町

県道12号周辺に増加あるいは当面維持，以降減少の地区が見られる。



(22) 上板町

県道12号周辺に増加あるいは当面維持，以降減少の地区が見られる。

5. 推計結果の考察

総じて人口が堅調に推移してきた松茂町、北島町、藍住町に加え、旧那賀川町、旧羽ノ浦町の幹線道路周辺が増加基調となっている。

徳島市も同様に、交通の便がよい幹線道路沿いが増加基調にある。また、中心市街地において増加傾向の地区も目立つ。これは、人口規模がさほど大きくないことに加え、マンション建設等による人口流入が大きく影響したものと考えられる。

県南部では、増加傾向の地区が点在することから、それらの地区への集約が進んでいることもうかがえる。

徳島市、松茂町、北島町、藍住町を除く県中央部も、一部地区が増加傾向にあることから、同様に集約の進行があると推定される。

県西部は、三好市、東みよし町の東寄りが増加基調にあるものの、総体的な減少傾向であると考えられる。

6. 市町村間の移動状況の検討

人口増加傾向の地区が多い徳島市、阿南市、松茂町、北島町、藍住町及び隣接する鳴門市、小松島市の間での平成18年から平成22年までの移動状況を表したのが表1である。純増減数は転入から転出を差し引いた増減数である。

徳島市は、鳴門市、小松島市、阿南市からの転入が多い一方、北島町、藍住町への転出が多い。

鳴門市、小松島市はほとんどの市町に対し転出が超過している。

阿南市も同様の傾向にあるが、小松島市からの転入が目立つ。

松茂町は、鳴門市からの転入が多いが、北島町、藍住町への流出が見られる。

北島町、藍住町は、ほとんどの市町に対し転入超過であるが、この2町間では北島町への転入超過となっている。

総じて見ると、徳島市が周辺市からの転入を受入れ、徳島市から北島町、藍住町に転出する形となっている。

また、阿南市の旧那賀川町、旧羽ノ浦町は、旧阿南市を含めた小松島市以南からの転入を集めていると推測される。

世帯数で見ると、4市が2～3%程度の増加に止まるのに対し、北島町、藍住町は9%近くに達している。

平成26年の市町村間移動においても、傾向として変わりはないものの、鳴門市からの流れが松茂町から北島町、藍住町に移っていることがうかがい知れる。

世帯数でも、平成22年と平成27年の比較において、全体的に増加率が鈍化するなか、北島町、藍住町は7～8%程度と高水準の増加を続けている。

7. 総論

今回の調査から、産業、大学等を抱える徳島市が人を集め、居所を構えるにあたっては北島町、藍住町に動いていると考えられる。県南は旧那賀川町、旧羽ノ浦町の幹線道路周辺を中心とした集積傾向にあることがわかった。

また、徳島市中心市街地において人口増加傾向が見られ、商業施設の衰退とともに、マンションの建設など住宅地化が進んでいる実態も見受けられた。

県内においては、コンパクトシティ、CCRC構想を掲げる市町も出始めており、居住機能の集積は今後も強まっていくものと考えられる。

人口推計は冷めた見方との指摘もある。20～39歳の女性が半減すれば消滅の可能性がある、確かに計算上は事実である。

冒頭にも述べたが、本調査はそこに止まらず、さらに一步踏み込んで小地区に目を向け、今後の地域のあり方を考える上での示唆を試みたものである。

人口が減少していなければ、安心して見ていられるものだろうか。今回の調査の結果、当面の間は人口規模を維持するものの、後に減少傾向に推移する地区が多く見られた。こうした地区は少子化傾向が強く、時の経過とともに高齢化が進むことから、地域活動を支える仕組みに歪みが生じる恐れがある所ともいえる。

また、一時的な流入の結果、「増加」を示した地区もあると考えられることから、平成27年国勢調査の小地区集計が公表された際には、今回の結果と比較、検証すべきであることは言うまでもない。

県外への流出に歯止めがかからない状況にある昨今、行政規模もいずれは縮小を迎えることが予想される。住民自治に立ち返り、地域でできること、できないことの検討を進めていくべき過渡期にあり、人口規模だけでなく、年齢構成や社会増減の動向をも踏まえ、綿密な分析が求められる時期に差しかかっている。

人口減少の流れを根本的に変えるのは困難である。

ならば、いかに地域の活力を維持するか。地域の実態を見極め、行政頼みとならない力強いコミュニティをどう作り上げていくか。民・官一体となった今後の取組が期待される。

表 1 : 市町間移動人口（平成 18 年～ 22 年）及び世帯数の変化

転入

	(従前地)							合計
	徳島市	鳴門市	小松島市	阿南市	松茂町	北島町	藍住町	
徳島市	0	1,989	2,366	2,476	828	1,211	1,630	10,500
鳴門市	1,783	0	148	258	459	526	556	3,730
小松島市	1,852	162	0	1,040	84	70	119	3,327
阿南市	2,020	205	1,121	107	79	96	135	3,763
松茂町	875	569	93	101	0	257	146	2,041
北島町	1,584	524	90	131	324	0	384	3,037
藍住町	2,001	603	142	151	168	331	0	3,396
合計	10,115	4,052	3,960	4,264	1,942	2,491	2,970	29,794

転出

	(転出先)							合計
	徳島市	鳴門市	小松島市	阿南市	松茂町	北島町	藍住町	
徳島市	0	1,789	1,848	2,035	872	1,603	2,007	10,154
鳴門市	1,988	0	162	206	571	536	604	4,067
小松島市	2,366	148	0	1,122	93	95	139	3,963
阿南市	2,501	266	1,049	108	105	137	153	4,319
松茂町	837	460	83	80	0	333	167	1,960
北島町	1,198	522	71	96	256	0	317	2,460
藍住町	1,622	553	119	135	149	393	0	2,971
合計	10,512	3,738	3,332	3,782	2,046	3,097	3,387	29,894

純移動数

	(移動数)							合計
	徳島市	鳴門市	小松島市	阿南市	松茂町	北島町	藍住町	
徳島市	0	200	518	441	-44	-392	-377	346
鳴門市	-205	0	-14	52	-112	-10	-48	-337
小松島市	-514	14	0	-82	-9	-25	-20	-636
阿南市	-481	-61	72	-1	-26	-41	-18	-556
松茂町	38	109	10	21	0	-76	-21	81
北島町	386	2	19	35	68	0	67	577
藍住町	379	50	23	16	19	-62	0	425
合計	-397	314	628	482	-104	-606	-417	-100

世帯数

	平成 17 年			平成 22 年			増減率	
	世帯総数	一般世帯	施設等	世帯総数	一般世帯	施設等	世帯総数	一般世帯
徳島市	109,698	109,359	249	111,675	111,434	241	1.0180	1.0190
鳴門市	22,343	22,263	72	22,994	22,932	62	1.0291	1.0300
小松島市	15,045	15,012	32	15,201	15,172	29	1.0104	1.0107
阿南市	26,116	26,052	60	26,910	26,851	59	1.0304	1.0307
松茂町	5,362	5,344	18	5,602	5,570	32	1.0448	1.0423
北島町	7,597	7,588	8	8,269	8,260	9	1.0885	1.0886
藍住町	11,061	11,040	21	12,098	12,070	28	1.0938	1.0933
合計	197,222	196,658	460	202,749	202,289	460	1.0280	1.0286

■ データ出典

国勢調査 平成 17 年, 22 年

徳島県人口移動調査年報 平成 18 年～22 年

表 2 : 市町間移動人口（平成 26 年）及び世帯数の変化

転入

	(従前地)							合計
	徳島市	鳴門市	小松島市	阿南市	松茂町	北島町	藍住町	
徳島市	0	437	436	467	168	256	306	2,070
鳴門市	328	0	33	50	103	71	74	659
小松島市	328	26	0	140	17	12	13	536
阿南市	350	45	163	0	18	12	33	621
松茂町	134	111	19	15	0	26	19	324
北島町	283	137	27	20	80	0	49	596
藍住町	368	130	8	31	21	79	0	637
合計	1,791	886	686	723	407	456	494	5,443

転出

	(転出先)							合計
	徳島市	鳴門市	小松島市	阿南市	松茂町	北島町	藍住町	
徳島市	0	335	325	352	132	282	370	1,796
鳴門市	439	0	22	47	111	138	130	887
小松島市	437	33	0	162	19	27	8	686
阿南市	474	50	139	0	15	22	30	730
松茂町	157	103	17	18	0	81	20	396
北島町	258	72	12	13	26	0	79	460
藍住町	307	74	13	32	19	49	0	494
合計	2,072	667	528	624	322	599	637	5,449

純移動数

	(移動数)							合計
	徳島市	鳴門市	小松島市	阿南市	松茂町	北島町	藍住町	
徳島市	0	102	111	115	36	-26	-64	274
鳴門市	-111	0	11	3	-8	-67	-56	-228
小松島市	-109	-7	0	-22	-2	-15	5	-150
阿南市	-124	-5	24	0	3	-10	3	-109
松茂町	-23	8	2	-3	0	-55	-1	-72
北島町	25	65	15	7	54	0	-30	136
藍住町	61	56	-5	-1	2	30	0	143
合計	-281	219	158	99	85	-143	-143	-6

世帯数

	(世帯数)			
	平成 22 年	平成 27 年	増加数	増加率
徳島市	111,675	114,352	2,677	1.0240
鳴門市	22,994	23,233	239	1.0104
小松島市	15,201	15,235	34	1.0022
阿南市	26,910	27,208	298	1.0111
松茂町	5,602	5,887	285	1.0509
北島町	8,269	8,811	542	1.0655
藍住町	12,098	13,123	1,025	1.0847
合計	202,749	207,849	5,100	1.0252

■ データ出典

国勢調査 平成 22 年, 27 年

徳島県人口移動調査年報 平成 26 年

8. 事例紹介 ～松山市三津浜地区における地域再生の取組～

(1) はじめに

今回の調査研究は、活動の制約もあったことから、机上論に終始している。現地に赴き実態を調査し、また話を聞くことで検証を進めるべきであり、報告としては仮定の域を超えず説得力に欠けるものとなっている。

そんな中ではあるが、今年度、愛媛県松山市三津浜地区において行われている地域再生の取組を視察する機会に恵まれたので、これを紹介し、結びとしたい。なお、以下の背景、事業概要等は松山市ホームページより抜粋し、再構築している。

(2) 背景

松山市の西部に位置する三津浜地区は、江戸時代には松山藩の御船手組（船奉行所）が置かれた港町で、漁業や商業で栄え、明治から昭和の中頃まで松山と本州や離島を結ぶ海の玄関として、あるいは松山市の物流の拠点としての要衝となっていた。

近年においては、海から陸、空へと交通手段が変化したことに加え、近隣の高浜旧港、松山観光港等の整備によって、三津浜地区の事業所数・従業者数、人口及び世帯数は減少傾向にあり、一方で高齢化が進行し、まちの活力の低下が顕著になっている。

松山市では、小説『坂の上の雲』ゆかりの史跡や地域固有の貴重な資源が数多くある市内全体を「屋根のない博物館」として捉えた「『坂の上の雲』フィールドミュージアム構想」を掲げ、回遊性の高い物語のあるまちづくりに取り組んでいる。松山城周辺をセンターゾーン、その回りに6つのサブセンターゾーンを配置し、三津浜地区は「三津浜・梅津寺地区」として、サブセンターゾーンの1つに位置づけられている。また、住民が主体となった「三津浜地区まちづくり協議会」が平成22年5月に設立され、多様なまちづくり活動に取り組んでいる。



(3) 事業概要

三津浜地区には多くの魅力的な地域資源があるものの、いわゆる「観光地」という性格は弱く、また多くの空き店舗や空き家の存在がまちの活力の低下につながっていることから、集客につながるまちの魅力を高めることによって、新たなにぎわいと交流の創出を目指している。

①地域資源を活かし、住民自らが活動できる環境づくり

近年増えつつある町家等の空き家を活用して、外から三津浜地区に住む人や新たに地区内で生業を営む人を増やし、「まちを歩くと、楽しい・おいしい・にぎやかだ」というまちづくりを推進することによって、三津浜地区の活性化を目指す。

②外から「行ってみたい」「住んでみたい」と思わせる「魅力」づくり

まずは「三津浜のまちに行ってみよう、歩いてみよう」と思わせる魅力（発意行動魅力）づくりを行うため、三津浜地区の魅力の一つである、ご当地の「食」をブランド化していく。

③多様な「住民」が活躍できる体制づくり

外からの新しい風として、三津浜地区のまちの魅力に惹きつけられた若い人々の活動を、住民や事業主など多様な関係者と有機的に結びつけ自主的な活動を促すとともに、具体的な活動の推進役となる中間支援組織をつくり、三津浜地区の魅力を外に向けて積極的に情報発信していく。

(4) 町家バンクの推進と運営支援

三津浜地区では、三津浜地区の空き家を登録制にする等、入居・開業希望者と結びつける「町家バンク」の仕組みを構築し、所有者と入居希望者の需要と供給のマッチングを図っている。

○三津浜地区にぎわい創出事業業務委託の概要

「坂の上の雲フィールドミュージアム」のサブセンターゾーンとして位置づけられている三津浜地区を、道後温泉、松山城に続く第3の観光拠点としてにぎわいを創出することを目指し、レトロなまち並みを市民や観光客が散策する動線づくりを行う。

①「町家バンク」の仕組みを構築し、そのための組織づくりを進める。

②建築物の調査結果を踏まえながら、「町家を利用したい人」と「町家を残していきたい所有者」の需要と供給のマッチングを図る。

③地域資源を活用し、地区内外の多様な人々が参画する新規イベントメニューの構築を図る。

④まちづくりの取り組み・活動を活かす観光プログラムを住民と協働して作成する。

⑤三津浜地区にぎわい創出協議会における資料作成、説明補助、意見集約、報告書作成及び議事録作成等を行う。

⑥自発的な社会貢献活動を行っている地縁組織及び市民活動団体の活動を支援するとともに、両者の連携、協働さらには行政との協働の実現を図る。

⑦受託者が提案する効果的な業務

⑧その他の業務

※当該事業は「ミツハマル運営事業」として継続実施されている。

(5) 視察を終えて

今回の視察では、地元の世話人の方の案内で、三津浜地区の町並みを散策しながら、カフェ、楽器店、雑貨店などを営む移住者、出店者の話を伺った。景観が気に入って出店を決めた方もいれば、移住後に趣味が高じて出店に至った方など様々であるが、空き家を改装、活用することで息吹を取り戻し、さらには自然と元の町並みに溶け込んでいる印象を受けた。

古くから栄えた町だけあって、古民家が建ち並び、銀行、病院など当時では珍しかったであろう建物も保存され、貸出用の空き家として利用されている。

後日、松山市担当者にお話を伺った。

“フィールドミュージアム構想は、松山市内外からの交流人口拡大に向けた観光施策である。三津浜地区では、地元の要望を受け「町屋バンク」をスタートさせ、今では地域振興に軸足を移しつつある。協議会組織で景観ワークショップを実施し、保全すべきもの、活用すべきものに分類して空き家情報を発信している。現在は市から民間事業者への委託事業であるが、将来的には地区で自主的に運営してもらおうこととしている。”

特筆すべき点として、まず、地域を限定し、その特色を活かした振興策としていることが挙げられる。また、地域の要望に応え、ともに考えていくというスタイルを取り入れている。加えて、地域でできることは地域でという将来展望を持っている。

今回の調査研究の主旨にも合致したものであり、先行事例を真似るということではなく、今後の地域のあり方を考える上で、学ぶべきことが多い取組であると感じた。

地方を創生するには、一度、住民自治に立ち返って物事を考えることも重要ではないだろうか。



参考文献等

- 石川晃著「市町村人口推計マニュアル」古今書院 1993 年
- 松山市ホームページ <https://www.city.matsuyama.ehime.jp/>

地図作成

- 統計局ホームページ <http://www.stat.go.jp/>
地図による小地域分析 (j S T A T M A P)

データ出典

- 国勢調査 平成 17 年, 22 年, 27 年
- 徳島県人口移動調査年報 平成 18 年～26 年